

國學院大學学術情報リポジトリ

アメリカの神道観に関する一考察： ロバート・O・バーロウ「神道」の紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 一伯 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002316

アメリカの神道観に関する一考察

——ロバート・O・バーロウ『神道』の紹介——

佐藤 一 伯

はじめに

筆者は拙稿「GHQの神道観に関する一考察——『日本の宗教』を介して」^①（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十八号、平成二十三年）において、GHQの神道理解についての基礎的な作業の一つとして、総司令部民間情報教育部宗教文化課編（文部省宗教研究会訳）『日本の宗教』（国民教育普及会、昭和二十三年）を紹介した。その際、『日本の宗教』における神道の「国家神道」「教派神道」「民間信仰」という三分類は、アメリカの文化史家ロバート・O・バーロウが一九四五年十月に自国の一般読者を対象に著した『神道——征服されざる敵』^②と同じであり、同書が『日本の宗教』の記述、つまりGHQの神道観形成に果たした役割も少なくないであろうことを指摘した。また、『日本の宗教』の背景には、W・G・アストンやD・C・ホルトム、加藤玄智ら欧米と日本の研究者の長期に及ぶ学术交流があったこと、さらには、「政治史的イデオロギー性を濃厚に有した日本近代史の一分野として出発した」^③（阪本是丸

「国家神道」研究の四〇年『日本思想史学』第四十二号、平成二十二年）戦後の「国家神道」の研究をかえりみ、制度や思想の政治的側面のみならず文化的側面の考察をも視野に入れるべく、近代日本の国際的学術交流の視点を念頭に置いた調査の継続を今後の課題とした。

以上を受けて、本稿ではバーロウの『神道』の紹介を通して終戦直後のアメリカの神道観について考察してみたい。本書は上製本（縦二二糎、横一四糎）二三九頁で、第一部「神道の歴史と意義」、第二部「日本の文献からの抜粋」からなり、第一部は「なぜ神道なのか」、「日本人と神道の起源」、「民族の優越性の神話」、「初期神道の儀式と倫理」、「仏教の伝来」、「天皇の没落」、「国つ神への回帰」、「王政復古」、「悪魔が聖書を引用する」、「希望の光」の十章で構成されている。第二部は「第一期（七二二～九二五年）」、「第二期（九二五年～一七〇〇年）」、「第三期（一七〇〇年～一八六七年）」、「中間期（一八六七年～一八九〇年）」、「第四期・近代神道の時代（二九一四年以降）」、「降伏の週（二九四五年八月十二日～十九日）」、「教派神道の教義」の七章に分けて、古典等の文献を英訳して掲載している。以下では第一部を翻訳した、ロバート・O・バーロウ著（生江久訳）『神国日本への挑戦——アメリカ占領下の日本再生教育と天皇制』（三交社、一九九〇年）に拠りながら紹介していきたい。

一、バーロウ『神道』の内容（一）——第一章～第八章

神道の重要性和明治維新までの歴史を扱った、本書の第一章から第八章の内容は次のようになっている。

日本との戦争で、連合国が戦った相手は単に陸海空軍だけではなく、さらにもう一つ、イデオロギーとの戦いがあった。それは汎ゲルマン主義よりも一〇〇〇年以上も古く、たび重なる変遷を経たのちでもなお、国内でそれにとって

代わる大きな思想が出現することはなかった。また、古代から連綿と伝わる宗教的な崇敬の念を背景としていたために、一つの民族を慣らすことにかけてはナチズムよりはるかに強力であった。日本の軍事力に対する勝利のみでは、日本軍に生命と力と世界制覇の目的を与えていた神道の力を征したということにはならない。(第一章「なぜ神道なのか」)

日本人の神々を崇拝するやり方や神々の世界についての考え方は、色々な面で他の多くの原始宗教と似ている。宇宙を創造する力は、父なる空と、母なる大地、そして両者の融合から創造の過程が生じるという、ほとんど世界共通の考え方と容易に関連づけることができる。太古の神々はすべて自然の擬人化であり、その中心は太陽がある。その崇拜は、後に神道のパンテオンの中心となる女神への崇敬へと具体化していくのだが、現実の太陽そのものを拝むことも庶民の間からなくならなかった。初期の神道では天のカミは地上の人間より単に強力な存在にすぎず、自然から得た並はずれた能力と共に、善きにつけ、悪しきにつけ、きわめて人間的な特性を身につけていた。神道では儒教的な「天の息子」の概念を適用しながらも、日本の島々の最初の統治者は天から降った天の神であり、彼に続くすべての天皇は、この神聖な直系の子孫であるとされた。(第二章「日本人と神道の起源」)

神道のイデオロギストたちは、他の政治的、社会的概念を、全く相反する教義にねじまげ取り込んでいく天才であったように思われる。われわれがすでに見たように、中国の「天の息子」という基本的な崇高な概念——個人ではなく社会統治権の神格化——が、日本では個人を絶対的支配者に高めることによって、人民から自治の権利を奪う道具になってしまった。同様に神道の八紘一字の思想も、人間の精神に生じるもっとも偉大な社会認識の一つを歪曲し、はなはだしくおとしめたものである。それは普遍的な兄弟愛などは無視して、地上のあらゆる人種に対して一つの人種(日本人)の優越性を主張し、人類すべての絶対的支配者として、たった一人の君主——日本の神聖な天皇——を打

ち立てようとするものである。(第三章「民族の優越性の神話」)

神道には正義を求める祈りはなく、道徳的規範の欠如し、死と穢れを浄化する儀式が営まれている。しかし仏教の日本到来とともに神道は第二段階に入った。仏教は書物をもたらし「業」や「悟り」といった教義以上のものを教えはじめた。日本に到達する以前に千年以上を経っていた仏教は、誕生以来多くの修正をくりぬけてきていた。融合の過程はすべての宗教の場合の諸説混交の特徴と似たようなものである。幅広い諸説混合主義で最も大きな影響を与えた初期の僧は空海である。空海は神道のパンテオンのすべての神々は仏の化身、あるいは顕現であり、神道のカミも儒教の賢者も、仏教の仏陀も、みな同じ仏の霊であり、アマテラスオオミカミは大日如来あるいは阿弥陀仏であると宣言した。公然と男根の形で表現されていた様々な男根神は、小さなかぶりもの、上着、顔、手足を与えられて仏教の神々と名づけられた。神道が文献的に最も多作な時代(記紀、風土記、万葉集など)は、仏教が優勢になりつつあったときであるというのは興味深いことだ。神道の初期の記録がインドに起源をもつこの信仰の影響を少なからず見せているのも明らかであろうが、仏教が神道に影響を与えたのか、逆に神道が日本仏教形成に影響を与えたのかは、依然として疑問である。男根シンボルが仏教の神々に変えられたとすれば、いまでも残っている日本の記念碑の中には、神道信者によって男根の神々にされた仏教の神があるのも事実である。後世の両部神道の書物の一つで、この種の議論を引き継いだ題目を含む「和論語」からの抜粋を見ると、その教義にいかにも多くの部分が仏教や儒教のいくつかの観念を吸収したものであるかがよくわかる。こうして毎年毎年、一世紀一世紀、一方による他方の征服というよりは、両者の融合が続いた。(第四章「初期神道の儀式と倫理」、第五章「仏教の伝来」)

弘法大師によって両部神道が始められてから約一〇〇〇年近くのちおこった神道再建の政治的意義を理解するためには、ここで日本の世俗の歴史を検討しておく必要がある。七九四年、征夷大將軍という、のちに日本の事実上の支

配者の称号となる位が大伴弟麻呂にはじめて与えられた。その後、源氏と平氏という、多くの戦闘グループのなかの最強の一団が、彼らの間の支配権をめぐって、最大の抗争をひきおこしたことは無理からぬことであつた。將軍の統治下、神道も仏教も発展の過程にあり、仏教ではいまも指導的地位にある四つの宗派がおこつた。仏教諸派に対立する運動のうち、將軍支配のはじめの数世紀に最も影響力があつたのは、唯一神道あるいは吉田神道と呼ばれる一派であつた。武士道の源泉を神道と仏教の両方に見いだすことは難しくない。すなわち、仏教における静かな運命論、生死を輕視し死を歡んで迎える態度、不可避なものを受容し引き受ける態度、絶対的なものとの融合を見出そうとする試み、さらに神道における、最高統治者に対する尊崇と忠誠、罪という概念の欠如、理念上はサムライたちがそのために戦っていた日本の国土そのものを神聖とする考え、などである。中世初期を通じて、神道の生命力に富んだ核は、仏教の攻撃を受けても無傷で残り、領土拡大という中世的な試みを正当化するために利用された。(第六章「天皇の没落」)

十七世紀終わりになると、武士は倫理規範や礼儀作法、すなわち武士道を通してリーダーシップを確立したのみならず、知的関心を中国や日本研究に向けるようになった。このことは知識人たちの心をますます仏教的な文献から遠ざけることになった。賀茂真淵の後を継いだ弟子・本居宣長は日本が生んだ最も偉大な学者の一人である。中国攻撃をさらに推し進め、また老子の教えを単に「自然の道」に過ぎないと否定し、真の神道はまさに「神の道」であると主張した。この時期に思想の流れを極端な民族主義的、天皇崇拜主義的の神道に逆戻りさせた第三の学者が、平田篤胤である。キリスト教はすでに十六世紀ごろに日本に入ってきたが、純正神道の復興が盛んに唱えられたこの時期には激しい弾圧の対象となつた。(第七章「国つ神への回帰」)

復古神道派の教えのもっとも重要な成果は、日本国中に広まった尊皇派の運動であろう。この運動は、宗教思想を

揺り動かしたばかりでなく、最初は、政治変革をうながす強力な原因となり、のちには政治的道具となった。(第八章「王政復古」)

二、バーロウ『神道』の内容(二)——第九章・第十章

第九章・第十章では、近代以降の神道について次のように述べている。

一八八二年、すべての神道組織は二つの種類に分けられた。

(一) 国家機関、すなわち神社。

(二) 教派神道の機関、すなわち教会。

これに伴い、教派神道に対するすべての政府支援が取り消された。彼らは今や(キリスト教会と同じように)個人の支援に頼らざるを得なくなった。一方、神社は政府の監督のもとに、政府による部分的な財政援助が与えられた。起こり得る未来の戦争に備えて、一つの国民を結束させるために、これほど堅固な計画が工夫されたことはない。ファシスト・イタリアやナチ・ドイツによって考え出されたパターンは、日本のその単なる弱々しい模倣にすぎない。それにくらべて日本人は、ほとんど全面的な教化を求め、それを達成したのである。ここには、ほぼ二〇〇〇年におよぶ一つの宗教から生まれた基本教義があった。それは、神としての天皇、日本国土の神聖さ、日本および日本人の神聖なる優越性、全世界に天皇の栄光を広めよという天からの使命である。

ともかくも、この分離によって、教派神道の指導者たちは束縛を離れ(もつとも国家の監視のもとではあったが)、国民の間に宗教心を増大させることになった(そのなかには、アマテラスオオミカミとその神聖なる子孫である天皇

への崇拜も含まれている)。一方、国家は天皇の神聖さと天上から下された使命を強調し、神道諸派が絶えず依拠していた基盤にもとづいて、いく重にも国家主義的教義化を築き上げようとした。この神道分離の事実は一八八二年以降の神道の意義を考慮する際、絶えず心に留めておく必要がある。

今日、神道という言葉は、一部は重なりあっているが三つの明白な勢力を指している。

(一) 民間神道

(二) 教派神道

(三) 国家神道

民間神道は民俗信仰と習俗の合成物であり、あるものはすべての日本人におなじみであり、あるものは特定の地域のみに見られる。稲荷信仰、お守りによる病氣治しなどの黒魔術や民俗祭祀、太陽崇拜など、村々のその土地の社、樹木崇拜、男根崇拜、山岳信仰、これらは民間神道のすべてに見られる。程度の差はあるものの、ほとんどすべての日本人が、神道の信者であれ、仏教徒であれ、さらにはクリスチャンでさえ、これには心を寄せている。先祖の霊を祀るために「神棚」を飾ったり、供え物をしたりする習慣は日本のいずれかの家庭にも見られるが、これも民間神道の領域に含まれる。玄関や台所に貼られている魔除けや病封じの聖なる護符も、民間神道である。一つの宗教というよりは、力強い民間伝承（フォークロア）にたとえられるであろう。

教派神道は、純然たる宗教勢力であり、真摯な神学と倫理を備えたすべての宗教を特徴づける普遍主義（ユニバーサリズム）を含んでいる。これに対して国家神道は、あらゆる人々に強制されたもつとも反動的な、もつとも強力な、侵略的国家主義と征服の教義である。一八八二年から現在まで、国家監督下の神社と教派神道の教会との分離が続いてきた。教派神道は、通常、教派の創唱者や過去の重要な宗教上の師の教えを中心に、宗教的な教化をとり行い、定

期的な教会奉仕、指導、祈り、儀式がある。教団はかなりの社会福祉事業を管理し、宗教出版物を発行する。これに對し国家神道は、民族主義精神や天皇への忠誠を促進するための公的な儀式、お祭および政府のプログラムにもつぱら関与した。

一八九〇年一〇月三〇日、教育勅語が發布された。これは現代日本の宗教および文化の歴史において、たいへん重要な役割を果たすことになる。興味深いことに、この勅語は外国の宗教を輕蔑する典拠として繰り返し引用されてきたが、中身はほとんど儒教の教えそのままである。しかし、これは国家神道の「聖書」といってもよく、国家宗教の解釈者たちには一つの指標としてたいへん高く評価されている。一八九九年八月一二日、文部省訓令第一二二号が發表され、公立、私立いずれの学校においても、宗教教育が禁止された。しかし学校では厳しい国家管理のもとに、神社の儀式、広く行きわたった国家の神聖さと国家への忠誠という教義、および天皇崇拜が教えられた。言いかえれば、国家神道は宗教ではなく、市民の責務を訓育するものと考えられ、その教えを義務づけることは、表面上、社会秩序と矛盾するとは見なされなかった。（第九章「悪魔が聖書を引用する」）

しかし、いかなる宗教も、完全に開明化された理想的な發達をとげているわけではない。現代のキリスト教儀式のなかにも、原始的な多神教、魔術的な形式主義、自然崇拜などの明らかな名残がある。それは多くの原始宗教や国家神道の基本要因となつてゐるものと似ている。神道の古い教義に本来そなわつてゐる力は、侵略戦争において国民を一致団結させる驚くべき力強い基盤となつたと同じように、平和で善意に満ちた進歩的世界を作るための強力な潜在能力なのである。日本人自身について言えば、お互い同士や自分たちの政府との關係では、彼らは、もつともまとまりのある、仲の良い、平和な、秩序正しい、家庭を愛する、勤勉な国民の一つである。全国民のためになると信じるものにはすすんで個人の生命をささげ、一つの主義主張に奉仕するためにすすんで自らの生命を投げ出す

のである。

日本人の間に、真の宗教意識の健全な発達を再び促すことが、われわれにできないだろうか。もしわれわれが、このたいへんな仕事をなしとげることができれば、われわれは日本におけるもつとも力強いイデオロギーの力を、平和と文明の事業に利用し、神道を現在のような敵としてではなく、強力な信頼できる友人とすることができらう。しかしながら、日本でも、宗教と政治の両方に進歩的で自由な啓蒙の炎が常に燃えつづけていたことを示すためには、ほんの少数の名前と過去の記録に注意を向けるだけで充分である。すなわち、第一に六〇四年に発布された詔令（十七条憲法）、第二の例は十八世紀の市河匡麿、第三の歴史的事例は王政復古の初期、日本に人民政府をつくることを訴えた自由主義のグループ、最後に新渡戸稲造と加藤玄智のような、その仕事に常に東と西の真の出会いに向けられていた現代の学者たちがいる。

アメリカの一八世紀の反乱におけるもつとも力強いスローガンの一つは、「民の声は神の声」であった。ならば、「日本人民の声はアマテラスオオミカミの声」を論証することは困難であろうか。そのような知恵と忍耐をもってすれば、すでに仏教や両部神道や神道諸派や、また過去の賢い自由主義的な世俗の指導者たちによってまかれた倫理的種子を、一つの教義にまで開花させることは可能だろう。そこでは、「八紘一字」とわれわれの世界同胞主義とマタイ伝の黄金律が同じことを意味するようになるだろう。

現代日本の哲学者のなかで、もつとも知恵ある故新渡戸稲造は『日本文化の講義』（一九三六年）で次のように書いている。

丘のふもとでは道は遠く離れている。しかし、高く登るにつれて道は近づき、やがて頂上で出会う。そして同じ神の知恵の高さから、眼下の広々とした景色をわかち合う。この高みで、時が熟して、北の哲学者が、南の予言

者が、西の思想家が、東の賢者が、共通の兄弟として結ばれる。そして「父」を拝めるときは近づきつつある。サマリヤの山でもなくイエルサレムの街でもなく、東でも西でもなく、真実心から、人々が兄弟愛のもとに集う所はどこにでも。

(第十章「希望の光」)

三、バーロウ『神道』の特色とアメリカの神道観——むすびにかえて

これまで見てきた記述の特色(背景)について、同書の参考文献を手がかりに考えてみたい。バーロウ『神道』は巻末に、六十三名が著した八十三点にのぼる参考文献(訳書含)を掲げている。このうち、複数の著作がある人は次の通りである。

- W・G・アストン(四点)……『日本文学史』(一九三七年)、『日本紀』(一八九六年)、『神道』(『宗教倫理事典』、一九二二年)、『神道』(一九〇五年)
- B・H・チェンバレン(二点)……『本居の中国・日本文化論について』(『日本アジア協会紀要』第一二巻第三号)、『古事記』(『日本アジア協会紀要』第一〇巻)
- J・F・エンブリー(二点)……『日本人』(一九四三年)、『日本国民』(一九四五年)
- D・C・ホルトム(六点)……『現代日本と神道国家主義』(一九四三年)、『日本の樹木崇拜について』(『日本アジア協会紀要』第二期第七巻、一九三一年)、『日本の即位式』(一九二八年)、『神の語義』(『Monumenta Nipponica』第三巻第一号・第二号、第四巻第二号、一九四〇～一九四一年)、『日本の国民信仰』(一九三八年)、

「現代神道の政治哲学」(『日本アジア協会紀要』第四九卷第二号)

新渡戸稲造 (三点) ……『武士道』(一九〇〇年)、『日本文化の講義』(一九三六年)、『日本国民』(一九一二年)

加藤玄智 (五点) ……『神道の研究』(一九二六年)、「日本人の宗教的觀念の發達についての考察」(『日本アジア協会紀要』第二期第一卷、一九二四年)、「儼追祭」(『日本アジア協会紀要』第二期第七卷、一九三一年)、「和

論語」(『日本アジア協会紀要』第四五卷第二号、一九一七年)、「神道とは何か」(一九三五年)

G・B・サンソム (二点) ……『続日本紀』(『日本アジア協会紀要』第二期第一卷、一九二四年)、『日本文化小史』(一九三二年)

E・サトウ (三点) ……『古代日本文学』(『日本アジア協会紀要』第七卷第二号・第四号、第九卷第二号、一八八九年)、「純神道の復活」(『日本アジア協会紀要』第三卷第一号)、「延喜式」(『日本アジア協会紀要』第七卷・第九卷・第二七卷)

参考文献の数による単純な比較は憚られるが、右の八名とくに三点以上の文献が紹介されているアストン、ホルトム、新渡戸稲造、加藤玄智、サトウの存在が注目されるべきであろう。

次に各章の記述に影響力のあつた文献を確認してみたい。第一章「なぜ神道なのか」では、D・C・ホルトム『現代日本と神道国家主義』⁽⁴⁾(一九四三年)からの長文の引用があり、神道のイデオロギーに注目する上で重視されたといえる。第二章「日本人と神道の起源」ではホルトムの論文「神の語義」⁽⁵⁾(一九四〇—一九四一年)、W・G・アストン『神道』⁽⁶⁾(一九〇五年)など、第三章「民族の優越性の神話」では加藤玄智の論文「日本人の宗教的觀念の發達についての考察」⁽⁷⁾(一九二四年)、アストン『神道』などを参照している。第四章「初期神道の儀式と倫理」では新渡戸稲造『日本文化の講義』⁽⁸⁾(一九三六年)、第五章「仏教の伝来」では加藤玄智前掲論文、第六章「天皇の没落」では新渡戸稲造『武

士道⁹」(一九〇〇年)、第七章「国つ神への回帰」では、E・サトウ「純神道の復活¹⁰」やホルトム『現代日本と神道国家主義』、第八章「王政復古」ではA・M・ナップ『封建時代と現代の日本』¹¹(一九〇六年)などの参照が顕著である。第九章「悪魔が聖書を引用する」ではホルトム『現代日本と神道国家主義』の引用が豊富に見られるとともに、章末にB・H・チェンバレン『新宗教の発明』(一九一二年)が紹介され、第十章「希望の光」では、前節で見たように新渡戸稲造『日本文化の講義』の引用で結びとなる。

バーロウの『神道』については、総司令部民間情報教育部宗教文化課編(文部省宗教研究会訳)『日本の宗教』「附録」(英文参考書)において、「国家神道の特徴づけた民族的優越と世界征服の教義の本質とその発展についての概観であつて、特に日本語原本から引用してあるので価値がある。ホルトムに師事¹²」と紹介されている。この評価は、とくに近代以降の神道を取りあげた第九章「悪魔が聖書を引用する」の記述に照らして妥当なものといえる。しかし本書全体を見た場合、ホルトムにとどまらず、チェンバレンやアストン、サトウ、新渡戸稲造、加藤玄智ら、日本アジア協會¹³で活動した他の欧米と日本の日本学者による研究成果の活用が確認できるように思われる。

してみると、「神道指令」の起草者であつたCIE宗教課長のW・K・バンスがホルトムの著作を尊重したことをもって、「神道について」の「西欧世界の観察者」のうち、いわばチェンバレンの「系譜」を主な情報源としたことの意味は決して小さくない。それは「外部」からの知的な「日本理解」を決して軽視してはならないことを示している¹⁴」と指摘されてきた点について、もう少し細かな検討が必要であろう。「神道指令」はGHQの神道観を示す重要な文書であるが、占領政策に及んだ神道観の全容を理解するには、「神道指令」への系譜のみでは不十分であり、本書に見られるような、「神道指令」の文面に盛り込まれなかったアメリカの神道観への系譜をも理解することが重要と思われる¹⁵。今後このような問題意識による調査を継続していきたい。

註

- (1) 拙稿「GHQの神道観に関する一考察——『日本の宗教』を介して」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊四八、平成二十三年)。
- (2) Ballou, Robert O., *Shinto, the Unconquered Enemy*, New York, Viking Press, 1945. (ロバート・O・バロウ著、生江久訳『神国日本への挑戦——アメリカ占領下の日本再生教育と天皇制』、三交社、一九九〇年)
- (3) 阪本是丸「『国家神道』研究の四〇年」(『日本思想史学』四二、平成二十二年)、四六頁。
- (4) Holtom, D. C., *Modern Japan and Shinto Nationalism*, Chicago, University of Chicago Press, 1943. (ダニエル・クラレンス・ホルトム著、深澤長太郎訳『日本と天皇と神道』、逍遙書院、昭和二十五年)
- (5) Holtom, D. C., "The Meaning of Kami", *Monumenta Nipponica*, Vol. III, No.1 and 2, and Vol.4, No.2, Tokyo: Sophia University, 1940-41.
- (6) Aston, W. G., *Shinto, the Way of the Gods*, London, Longman, 1905. (ダブリュー・ジー・アストン著、補永茂助・芝野六助訳『日本神道論』、明治書院、大正十一年。ウィリアム・ジョージ・アストン著、安田一郎訳『神道』、青土社、昭和六十二年)
- (7) Kato, Genchi, "A Study of the Development of Religious Ideas Among the Japanese People as Illustrated by Japanese Phallicism", *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol.1. 2nd Series, London: Kegan Paul, Trubner and Co., 1924.
- (8) Nitobe, Inazo, *Lectures on Japan*, Tokyo: Kenkyusha, 1936.
- (9) Nitobe, Inazo, *Bushido, the Soul of Japan*, Philadelphia: The Leeds and Biddle Co., 1900.
- (10) Satow, Ernest, "The Revival of Pure Sgintau", *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Reprints, Vol.2, 1927.
- (11) Arthur May Knapp, *Feudal and Modern Japan*, Yokohama: The Advertiser Publishing Co., 1906.
- (12) 総司令部民間情報教育部宗教文化課編(文部省宗教研究会訳)『日本の宗教』(国民教育普及会、昭和二十三年)、三〇〇頁。

- (13) 日本アジア協会については、ダグラス・M・ケンリック著（池田雅夫訳）・市民文化研究センター編『日本アジア協会一〇〇年史——日本における日本研究の誕生と発展』（横浜市立大学経済研究所、平成六年）、楠家重敏『日本アジア協会の研究——ジャパノロジーことはじめ』（近代文芸社、平成九年）等を参照。
- (14) 春山明哲「靖国神社とはなにか——資料研究の視座からの序論」（『レファレンス』五六―七、平成十八年）、五九頁。
- (15) GHQの神道観と宗教政策に関する先駆的な研究に、W・P・ウツダード（阿部美哉訳）『天皇と神道——GHQの宗教政策』（サイマル出版会、昭和六十三年）がある。